見知らぬ誰かの手助けに

砺波市立庄西中学校２年　　亀田　久瑠海

「実は、昨日病院で検査をしてきたら、乳がんになっていることが分かったの。」

一昨年の夏の暑さが少しやわらいだ頃、母にそう告げられました。母は、それまで一生懸命に仕事をしていましたが、もちろん仕事はやめ、家で療養することになりました。

母が仕事を通して知り合った方や友達、親せきなどの色々な方から母のことを心配した内容の電話がかかってきました。

「税金があって助かるわ。」

母は電話の中で一度はこの言葉を口に出していました。

消費税が八パーセントから十パーセントに引き上げられたときは、嘆いていたので、税金は母にとって煩わしいものなのかと思っていました。疑問に思い、なぜ助かったのか母に尋ねました。

母の髪は抗がん剤治療の副作用により、なくなりました。左胸は、がんが広範囲に及んでいたので全摘しました。そのため、ウィッグと乳がん専用の特殊な乳房補正具が必要になってきました。しかし、どちらも高額で簡単には手が出せず、買うのを渋っていました。そのような時、砺波市がウィッグと乳房補正具の購入費用の一部を助成してくれるという内容のお知らせが届きました。その助成があったおかげで母は、ためらうことなく必要な物を買うことができたそうです。

この助成して頂いた費用は、税金です。税金は困っている人のために使われたり、警察や消防、ゴミ処理、医療、教育などに使われたりしています。これらは全て、当たり前の毎日を過ごすために欠かせないものです。

私はコロナ禍の状況の中で当たり前な日常とは幸せな日常であるということに気づきました。税金という存在は、幸せな日常をつくるカギです。

私たちの身近では、たくさん税金が利用されています。私の普段通っている学校のものも税金が利用されていて、学校の運営にも税金が利用されています。これに使われている税金は顔も知らない誰かが納めてくれている税金です。見知らぬ誰かが税金を納めてくれるおかげで私たちは教育を受けることができ、医療を受けることができ、幸せな日常を送ることができています。反対に私たちが納めている税金も誰かのために利用されています。自分の納めた税金が実際にどこでどんな風に利用されているかは分かりません。けれど、誰かの役に立っている、これは確かです。もしかしたら誰かの未来をつくっているかもしれません。

私も税を納め、誰かの役に立ち、手助けになりたいです。